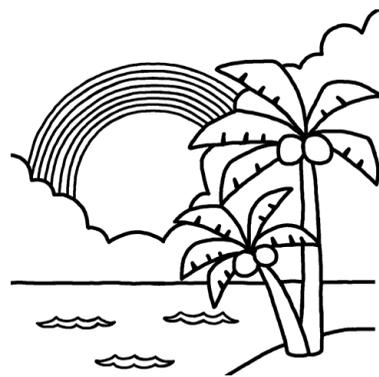


バプテスマを授かったばかりのビギナーでまだ何もわかりません、またそれにより何が変わったのか確かなことはわかりませんがクリスチャンになったことでこれから信仰の道を進めていきたいと思えます。
本日私たちにこのような機会をお与えいただきましたこの教会の皆さま、藤浪牧師そして朋子さんに感謝いたします。
最後にますますマキキ聖城キリスト教会が恵まれますように主イエスキリストの聖名において祈りつつ感謝いたします。
アーメン (3月16日 礼拝内での証より)



レインボーコネクション 土佐塾中学校 学生来会 感謝報告

3月19日から29日まで、高知県 土佐塾中学校より、学生7名、引率1名、計8名が、マキキ教会を訪れ、ユース達とのキャンプ、ホームステイ、ゴスペルフラ&ウクレレレッスン、スパムむすび作り、パイナップルカット、英語劇、市内観光、ウィルソン小学校での学校体験、ハワイ大学、JCCH見学、ダイヤモンドヘッドハイク、アロハパーティなどなど、多くの体験をし、教会メンバーとの交流も楽しみました。皆さんのお祈りと、献身的な愛の奉仕を通して、神様の愛が伝えられたと確信します。労して下さったすべての方に感謝いたします。今年で20年を迎えた、レインボーコネクションの働きが、主において紡がれますようお祈りください。



ミニストリーの紹介

マキキ教会には、沢山のミニストリーがあります。聖歌隊、ゴスペル・フラ、ウクレレ教室、親子会、絵画教室、韓国語クラス、のぞみの会など、楽しく集えるグループがあります。ぜひ、お気軽にお越しください。お問い合わせはオフィス(808-594-6446)まで。

2025年 3月発行

発行: MCC宣教部



天主閣だより

マキキ聖城キリスト教会

第346号

「たとえ谷間でも」～詩篇23篇～

マキキ聖城キリスト教会 藤浪義孝牧師

「【主】は私の羊飼い。 私は、乏しいことはありません。・・・たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわざを恐れませんが、あなたが私とともにおられますから。あなたのむちとあなたの杖、それが私の慰めです。」(詩篇23篇抜粋)

羊は元来日本には生息していませんでした。西暦5世紀に百済から贈り物として日本に送られた動物です。今では羊は肉用種として飼育されていますが、聖書の世界では、羊は人間に喩えられ、人間の精神的な真理や創造主なる神の配慮を例示するために頻りに用いられました。古くから羊は羊毛、羊乳、繁殖のために飼育されました。羊毛は、難燃性であるため、長持ちし気心地が良く、雪や雨に濡れても、暖かさを保つ特徴があります。羊乳は栄養価が高く、牛乳に比べてビタミンやミネラルを多く含み、健康全般に役立つ飲料です。ですから羊は、古くから貴重な動物として大事にされてきました。

この詩篇の作者は古代イスラエル王国第2代の王ダビデです。キリスト教葬儀によく使われるこの聖書箇所は、確かに愛する人を哀悼する人々へのメッセージを含んでいますが、実際は、死の時だけでなく「生涯のすべての日々」にわたって創造主なる神が、私たちにしてくださることに焦点を当てています。おそらく、ダビデの晩年に三男アブサロムによる反乱の頃に書かれたものです。ダビデにとってあれほどの惨劇はありませんでした。ダビデは、神と共に歩んだ長い人生の中で経験した困難な出来事を思い起こしながら、神のいつくしみと恵みを詩篇の中で綴っています。この詩篇は、あらゆる時代のあらゆる年齢の人々に愛読され引用される一方で、激しい戦いと葛藤を経験し、重荷を負いながらもひたすら敬虔に生きる人々に向けられたものです。

神の民がか弱い羊にたとえられている目的は「羊飼い」について学び、神がどれほど優しく私たちが気遣ってくださっているかを知るためです。食用のための羊肉にとらわれるとこの比喩表現を見逃してしまいます。羊は注意力や危機感にかけた動物です。迷子になりやすく、常に世話が必要です。羊は導かなければなりません。中近東の羊飼いは、羊たちを名前呼び、羊たちも羊飼いの声に反応します。

聖書の世界の羊飼いは、羊の世話をし、羊を導き、羊に食べ物と水を与え、羊が疲れたり、傷ついたり、傷つけられたり、病気になったりした時には丁重に世話をし、羊が迷子になった時には探しに出かけ助けました。あらゆる方法で羊を愛しました。ですから羊飼いがいるところには備えがあるので羊はいつも安心することができました。

「谷間」という言葉から思い浮かぶのは、山々の間に平穏に横たわる、なだらかな草地の「谷」や「牧草地」のイメージでしょう。しかし、この詩篇の「谷間」のイメージとは異なります。「谷」とは、深い溪谷や峡谷のことでした。狭く、暗く、湿気があり、通常は急な石壁に囲まれており、逃げ場のない場所でした。谷は、そびえ立つ断崖のふもとにあることが多く、蛇や野生動物、犯罪者が闇に潜んでおり、非常に危険な場所でした。また、パレスチナでは草が育つ季節が非常に短いので、羊飼いたちは残りの期間、羊たちに食べさせるのに苦労していました。そのため、羊を涼しく湿った土に生える植物が茂る谷へと導く必要がよくありました。牧草地に行くためには谷間を通る必要がありました。

「死の陰の谷」とは、羊飼いとその羊が通らざるを得なかった非常に危険な実際の谷の名前であったという説もあります。聖書に描かれている「谷」は人生の最も暗い時期の象徴です。「死の陰の谷」は、人生で最も深刻な状況、死が現実のものとなる恐ろしい状況について語っています。重病や病气、突然の健康問題、重大な事故、命にかかわる自然災害や人災、犯罪、暴力、戦争、テロ攻撃、飢饉や極度の貧困などです。しかし、ダビデは、人生の最も暗い谷間を歩むことを恐れないと証言しました。たとえ自分自身は無防備であっても、危険に直面しているのは自分だけでなく、主が共にいることに安心していたからです。主がそばにいてくださることが、ダビデにとって唯一の慰めでした。恐怖と戦慄から解放されたのです。

羊飼いは「むち」と「杖」という巧みな武器を備えていました。「むち」は、馬などを打って進ませる細長い棒ではなく、獣や盗賊を追い払うために携行した重い棍棒でした。それは致命的な武器でした。「杖」は羊飼いが羊を扱うために用いた道具でした。羊飼いは、荒地や岩だらけの場所を移動する際に、杖を支えとして用いました。ほとんどの杖の先端は曲がっており、羊飼いはそれをういて羊の足や首を優しく支え、穴から引き出したり、群れに戻したりしました。羊が群れから離れて迷い出たり、群れと一緒に進むのをためらったりしたとき、羊飼いは杖で羊を優しく突いて促しました。

ダビデは人生の谷間でも恐れることがありませんでした。なぜなら、主は彼の羊飼いであり、自分の迷いも含め、あらゆる死の危険から自分を保護してくれることを知っていました。主は、闇の中でもダビデをご自分のそばに置き、ダビデが向こう側の光へと無事にたどり着くまで、一步一步を共に歩んで導いてくださったのです。

人生において、私たちはさまざまな経験をします。その中には非常に困難なものもあるかもしれませんが、しかし、どのような困難なことも神はあなたから遠くにおられるのではなく、あなたのそばにいて、あなたを導き、恐れる心を鎮めてくださいます。主は、あなたの最も苦しい時にも共にいてくださるのです。

ぜひ、この詩篇をあなたの心の支えにしてください。

私は宗教についてあまり興味を持つことなく育ちました。キリスト教と言えば日本史で“以後よろしく”と覚えた1546年イエズス会フランシスコ・ザビエルにより日本に伝来したというのが最初の出会いであったと思います。私の趣味はスポーツと旅と献血です。旅ランとして昨年3月第1回ふくい桜マラソンを走り47都道府県フルマラソン完走コンプリート致しました。献血は昨年末に300回目を行いました。

そのような私が今回バプテスマを受けることになった経緯、マキキ教会のメンバー智津子との出会いを少しお話ししたいと思います。

最初の出会いは2023年2月22日那覇空港へ向かうANA1201便で隣の席になったことでした。

その後私が福岡出張の際何度か会い食事をいたしました。智津子は自分のことをよく話してくれました。ご主人が10年前に亡くなられたこと、とても良い方であったこと病床洗礼を受けられたこと、小さいころからクラシックバレエをしていて今フラの先生をしていること、クリスチャンであること、教会のことなど多くのことを話してくれました。

そして偶然ですが昨年6月にダニルエケイノウエ国際空港のANAラウンジで出会い、神様の御業と今になってみればそう思います。

クリスチャンであり、とても愛情深い智津子に次第に惹かれていきました。

1年前に二人でハワイに行く計画をしておりましたが、年末に智津子が大腿骨頸部骨折という大怪我をしまい今回は難しいかなと思いましたが、手術後約3週間リハビリを頑張り、Drに止められましたが半ば強引にハワイへ車椅子で参りました。その滞在中にこの教会を訪ね本当に奇跡のようですが智津子が美しく立ち上がることができました。

ほんのわずかな時間ですが彼女がいつも言っている“神のなさることは時にかなって美しい”とそんな彼女と神を僕も信じてみようと思いました。

その2日後の日曜日、私はこのマキキ聖城キリスト教会で信仰告白を致しました。

その後縁がありまして2人で対馬キリスト福音教会を尋ね牧師夫妻の温かいお人柄にふれ。また対馬の素晴らしい自然も感じ対馬で受洗することになりました。

そして受洗日7月31日は智津子の大切な前の夫、正人さんの昇天日でした。そしてイエズス会の初代総長聖イグナチオ・デ・デヨラ司祭の記念日でありました。

後から分かったことですが最初に申し上げたはじめて日本にキリスト教を伝えたフランシスコ・ザビエルの記念日は私の誕生日12月3日というのも何か必然につながっていると感じました。



2025年 3月発行

発行: MCC宣教部



天主閣だより

マキキ聖城キリスト教会

第346号